

病院からお年寄りの姿が消えている。代わって増えているのが、団塊の世代を中心とした50、60代。病院にとっては新たなお得意さまだ。一度足を運んだら、なかなか家に帰してくれないものだ。

薬漬け 検査漬け

次の力モは誰だ？



一度受診したら離してくれない

病院の「客層」が激変している。ひと昔前の病院といえは、「きょうは体調がいいので来ました」というお年寄りたちであふれていた。ところが、最近目立つのは、車で来院してくるような50、60代男女だ。

全国介護者支援協議会会長の上原喜光氏も、病院のおまりの変わりように驚いたという。「先週、血圧が高くなったので近くの病院を受診したのですが、待合室を見てビックリ。小さい子のほかは、私（1946年生まれ）と同級生のような患者ばかりなのです」。

お年寄りは、なぜ消えたのか。理由は簡単。70歳以上の医療費は長らく無料だったが、02年から1割負担（上限あり）に。現在は、69歳までは3割負担、70・74歳が1割、75歳以上は後期高齢者医



メタボ健診は「おいしい客」

国は医療費抑制に躍起だが、なせか悪評高いメタボ健診「特定健診制度」にだけは好意的。受診率が高い健康保険組合には、この褒美で高齢者医療制度の拠出金を減らすことまで検討している。なせし

で、09年は診療費の不正請求で約30億円を返還させた。これと別座5666病院を個別指導し、チェックの目を光らせている。もともと、病院からお年寄りが減ったと同時に医療機関の倒閉や閉鎖といった「ニュー・スも増えた。病院経営には、新たなターゲットが、どうしても必要。それが団塊以下の人たちのようだ。

「さしつかえは、血圧を測った病院でも、2週間後の再診予約を取られました。次は糖尿検査の検査をさすです。いま思っています。またこれを「検査漬け」というのかも知れませぬ」（上原氏）

「2カ月前、医師の勧めで、血液さらさらの薬のワーファリンを新薬のプラザキサに変更した。ただ、それまで2カ月ほど一度だけ診察が、2週間間に一度に。そのたびに再診料と処方料を取られ、新薬の負担額も2週間分で2800円。ワーファリンの10倍以上です。ですが、薬代が高すぎる」とは、男の訪券にかけた言葉えせん。

現役世代は力ネがあり、団塊の世代は時間もある。〈薬漬け〉〈検査漬け〉の標的にされ、病院の待合室に中年ばかりがあふれている。

ろ、サラリーマンのメタボ健診は、基本的に健保組合と本人負担で全額を賄う。国は税金を投入しなくていいので、当然やめというわけだ。当然、病院にとってもおもしろい客。日本医療データセンターの推計では、50代のメタボおやじの年平均医療費は、約23万5000円（自己負担約7万1000円）。自己負担が高かろうが、風邪気味だろうが、一度病院に来た客は、アリ地獄のように離してくれない。

「病院のサービスも変わってきています。土日の開院は当然、JR八王子駅直結のあるクリニックは、まるでホテルのロビーにいるかのような優雅さです。通勤途中のサラリーマン、買い物帰りのおばさまたちを意識して成功しています。二病院経営に詳しい国土師大野賢司（あまのけんじ）氏も、医療費の中で、薬局調剤費の伸び率が突出している。98年の1兆967.7億円から08年は5兆395.5億円へ2.7倍に増えた。

心房拡張の田中さん（53）は、最近こんなことがあった。